

病害虫発生特殊報 第1号

富山県農林水産総合技術センター所長

ネギハモグリバエの別系統の発生について

1 病害虫名 和名：ネギハモグリバエ別系統
学名：*Liriomyza chinensis* Kato

2 発生作物 ネギ

3 発生経過

平成29年頃から県内のネギ圃場で、ハモグリバエ類の多発生による著しい被害が確認された。その被害症状は、複数の幼虫が近接して葉肉を摂食し、白い筋状の潜孔を作り、特に、葉先の白化・枯死により生葉数が減少するなど従来の被害と様相が大きく異なった。そこで、京都府農林水産技術センターおよび地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 中央農業試験場に同定を依頼した結果、ネギハモグリバエと診断された。さらに、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センターに遺伝子型の解析を依頼した結果、従来の系統（A系統）とは異なる別系統（B系統）であることが明らかとなった（上杉・徳丸、2019応動昆大会）。

4 発生状況

国内における別系統の発生は、平成28年頃より京都府で、平成30年頃より茨城県で発生が確認されており、平成31年3月に京都府から、同年5月に茨城県から、それぞれ特殊報が発表されている。

5 被害

幼虫が葉中に潜り込んで食害し、食害後は白い筋状の潜孔を形成する。従来の食害では1葉あたり1～数頭で加害するのに対し（写真1）、別系統では1葉あたり複数頭の幼虫で集中的に加害する傾向がある（写真2）。

6 特徴

（1）形態

ネギハモグリバエの従来の系統と別系統は、形態による識別が困難である。両系統とも成虫の体長は約2mmであり、胸部と腹部が黒く、その他の部分は淡黄色である（写真3）。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約4mmに達する。蛹は体長約3mmの褐色、俵状である。

（2）生態

両系統とも成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表または土中で蛹となる。

7 防除対策

(1) 発生を認めたら、表1を参考にして、発生初期の防除を徹底する。

(2) 被害葉及び収穫残さは本種の発生源となるので、残さは圃場内に放置せず、一か所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。

表1 ネギのネギハモグリバエ(ハモグリバエ類)に対する主な防除薬剤

薬剤名	使用量または希釈倍数	使用方法	使用時期／使用回数	IRACコード
ベストガード粒剤	6kg／10a	株元処理	収穫前日まで／3回以内	4A
ダントツ粒剤	3～6kg／10a	株元散布	収穫3日前まで／4回以内	4A
スタークル粒剤 アルバリン粒剤	6～9kg／10a	株元散布	生育期 但し、収穫3日前まで／2回以内	4A
アグロスリン乳剤	2,000倍	散布	収穫7日前まで／5回以内	3A
ディアナSC	2,500～5,000倍	散布	収穫前日まで／2回以内	5
アグリメック	500～1,000倍	散布	収穫3日前まで／3回以内	6
リーフガード顆粒水和剤	1,500倍	散布	収穫7日前まで／2回以内	14
ベネビアOD	2,000倍	散布	収穫前日まで／3回以内	28

【参考資料】



写真1 従来の食害痕 (2013年)



写真2 別系統 (B系統) による食害痕 (2018年)



写真3 ネギハモグリバエ成虫 (体長約2mm)



写真4 ネギハモグリバエ多発生圃場

富山県農林水産総合技術センター 農業研究所 病理昆虫課

TEL 076-429-5249 FAX 076-429-7974

情報参考 URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/1661/index.html>